

第 48 回若手研究者・院生情報交換会 報告

テーマ : 研究の進め方とその方法
開催日時 : 2021 年 11 月 20 日 (土) 15 : 00~18 : 00
会場 : WEB 開催
報告 : 岡田 進一 (大阪市立大学)

今回、2021 年 11 月 20 日 (土) の 15 : 00~18 : 00 の 3 時間にわたり、WEB において、関西社会福祉学会第 48 回若手研究者・院生情報交換会が、「研究の進め方とその方法」というテーマで開催されました。なお、本情報交換会は、コロナ感染症拡大防止のため WEB 開催とさせて頂きました。そして、WEB 開催であったにもかかわらず、35 名のご参加を得ることができました。

最初に、関西社会福祉学会役員の阪口春彦氏より、大会開会の挨拶がありました。続いて、岡田が「研究の進め方」と題する教育講演を行いました。講演の中では、科学的研究を行うことの意味や意義、研究全体の概要、文献研究、質的研究、量的研究の概要、研究論文で重視されること、論文を書く際の留意点、引用を行う際の留意点、研究倫理などについて話をさせて頂きました。講演では、研究目的を明確にすること、研究の結果と考察・結論との関連性を明確にすること、研究の限界を理解し、今後の研究課題を明示することなどの大切さを強調しながら、研究についての話を進めさせて頂きました。

教育講演に続いて、「研究を進めていくポイント：研究の楽しさと難しさ」というテーマで、シンポジウムが行われました。シンポジストは、神部智司氏 (大阪大谷大学)、杉山京氏 (日本福祉大学)、楊曉敏氏 (大阪市立大学大学院生) で、コーディネーターは、岡田進一 (大阪市立大学) が務めました。

中堅研究者としての神部智司氏は、これまでの研究内容の概要についての話をされ、大学院生や若手研究者時代および中堅研究者における研究の楽しさを述べ、研究の難しさについては、現在の立場における研究の難しさについてのプレゼンテーションを行いました。研究の楽しさとして、①多様な機関や組織、所属学会などで、さまざまな関わりができ、研究を進めることができること、②自分のペースで研究を進めていくことができること、③周りの人々から、自分自身の研究論文や学会発表の内容が認識されていること、④学会発表などを行うことで、研修講師や原稿の依頼を受けること、⑥自分自身が行った研究の知見が行政計画などに反映されることなどをあげられました。

一方、現在の立場における研究の難しさとして、①若手研究者時代よりも、研究の視野や範囲が広がり、細分化された研究テーマに取り組むことが難しく、研究論文の執筆が難しくなってきたこと、②先行研究 (理論や概念モデル) と比較しながら、現在の研究を精査していくことの難しさに直面していること、③勤務校での業務負担が多くなり、研究時間に制約が生じていることなどをあげられました。そして、若手研究者時代とは異なる中堅研究者としての立場から、研究を進めることの難しさについての話をされ、プレゼンテーションを終えられました。

若手研究者の杉山京氏は、社会福祉学分野における科学的評価に関する研究内容と研究活動における楽しさ・難しさについてのプレゼンテーションを行いました。氏は、まず、これまで行ってきた量的研究についての内容や統計学的な分析方法についての話をされました。そして、研究を進めることの意義について、研究の楽しさや難しさを交え、話を進められました。そして、研究を進めるにあたっての考え方を、①研究成果は、研究対象者の切実な現状の代弁であり、そのことを意識しながら研究を進めていく必

要があること、②統計学は、学問領域を横断する共通言語であり、ソーシャルワークを科学的に他領域の方々に伝えていくために習得しておくことが望ましいこと、③研究は、経験則ではない内容を可視化でき、情報提供する内容なので、わかりやすい研究成果の開示を意識することなどの3点にまとめられました。

また、社会福祉学分野においては、一人で実施される研究が多く、それだけでは十分とは言えないとの話をされました。そして、意義ある研究を複数で共同研究していくことも必要であると述べられ、共同研究の重要性を強調されてプレゼンテーションを終えられました。

大学院生の楊暁敏氏は、博士論文の内容と大学院生の立場からの研究の進め方についてのプレゼンテーションを行いました。氏の博士論文は、「一人暮らし高齢者の担当経験を有する介護支援専門員の支援困難感に関する探索的研究」というテーマで、質的研究を発展させ、量的研究を行ったとのことでした。量的研究では、介護支援専門員の支援困難感の構造と支援困難感に関連している要因を明らかにしたとのことでした。

大学院生の立場からの研究の進め方についての話では、研究を進めて、論文を書く際、調査における分析についての考察を考えていく難しさを経験することもあるが、そのことを通じて研究者としての成長も実感でき、有意義な体験であったとのことでした。そして、氏は、自分自身の経験から、研究を進めていくポイントとして、①手本となる文献や文章を探し、書き方を参考にすること、②文献管理ツールを積極的に活用すること、③論文作成では、完璧を目指すのではなく、まず、完成させることを目指すこと、④指導教員と適切にコミュニケーションを取ること、⑤USBを過信せず、クラウドストレージなどの活用を行うことなどをあげ、プレゼンテーションを終えられました。

質疑応答では、学位論文、大学院生・若手研究者間のネットワークづくり、アンケート質問紙作成にかかる時間、インタビュー調査における対象者数、査読者とのやり取りにおける留意点などに関する質問があり、3人のシンポジストにより、適切な回答や提案がなされました。

最後に、関西社会福祉学会・日本社会福祉学会関西地域ブロック担当理事の所めぐみ氏が、閉会の挨拶をされ、無事、第48回若手研究者・院生情報交換会が閉会となりました。

最後になりましたが、本情報交換会の開催にあたりご協力を賜りました会員や関係者の皆様には心よりお礼を申し上げます。